

#### 虎 六 第 卷 一 第

を充事は考る し永りる なればないのです。 いくあります。それでなれて変れる。 私共は とは 33 る のべ 。そ 造世る ことです。一次を徙らに費べ滅の値ちとが 何んと云ふれて來た。而して來た。而して 吾今 でき然れる問が はもるでのは はし なのに其で之要 出來せ 毎く 日眞質 苦不か

六 第

は n

ず信

〇懺悔錄 〇「吾朋」便ら ○ドン底から法悅へ ○ゆかしさ ○正態の念佛 ○信ずればてそ . 目 次 俊

> ががてダ 啓行

いき急ケ

一つ力る 々てが時 テ排湧み キ泄い名 パけてを キな來呼 といまび 事時すま

事が處斷時佛を呼

さび

れなせ

行 3

5<sub>°</sub>

`ラ

5

カゞ

引

ら緊

れ○て○に○つ佛○み○感○ま忽○つ○ て大其誰泣悲て申怨名爲謝喜すち先て心 。し總 書でなくてはなりません。(対) 書がに充ちたとき高摩念佛申しま の信でなくてはなりません。(対) の信でなくてはなりません。(対) の信でなくてはなりません。(対) の信でなくてはなりませら。 と知り乍ら、為して を関いて下さらぬ事柄 さればならぬと知り乍ら、為して で変す。 を関いたでる時、み名を でがませら。 をでいたでる時、み名を でがないでである、生命 をでいませら。 はならぬを呼びませら。 はないて下さらぬ事柄 とい時や国った時計りの神賴みで でいまする。 でいませる。 でいまる。 でい。 でいな。 でいまる。 でいまる。 でいまる。 でいまる。 でいな。 でいな。 でいまる。 でいな。 でい。 でいな。 でい てはなりません。(헌) てでげし やるとしれれたされない 涙と共に い一下時 気が 素が さる。 の

『既に理解の時代は過ぎ去つた。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進め、「既に理解の時代は過ぎ去つた。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進め、「既に理解の時代は過ぎ去つた。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進め、 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進めてある。自己の人格と生活を完成せよ。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進めてある。自己の人格と生活を完成せよ。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進めてある。自己の人格と生活を完成せよ。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進めてある。 自己の人格と生活を完成せよ。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進めてある。自己の人格と生活を完成せよ。 『佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進め、 張固な「佛のみ國は最も遠くて而も足元から啓けてゐる。十字架を負ひて白道を進め、 張固な「中で佛を、張固な「一般」と、前らが總では無い、勿論說教や傳道を商賣『既に理解の時代は過ぎ去つた。

(対 進 め

# 正態の念佛

# 屋觀道

とへ封建時代の遺風なほ去り離きによさとはいへ宗教そのもの、本質さへ解せぬものであつてもとより だと云ふ仲間でありながら、其の信ずる信仰の内容について考へて見る時に多くは手製の信仰であつて、 私共の考究すべき問題であります。古來から宗敎に幾多の異說異論が百出しているやうに同じく念佛と 深く念佛に對する他宗他派の人々の見解に至つては一見深く佛敎を解せるやうに見えながらも未だ其 來の眞說を如實に信承してゐる人に至つては中々に少ないことではないとかと思ふのであります。 らだとはいへ無知も亦甚だしいと謂ふべきであります。乍然夫ばかりではない、現に同じく念佛信者 の宗の宗旨宗派 仰をも得ざるの程度であつて、決して念佛を正解し得るものでもありませんが、殊に是等の人々に に念佛と申しますけれども如何なる意味での念佛が最も正しい念佛であるかといふことは大い も亦色々の見解を異にしてゐるものがあるのであります。 の僧俗にして未だ其の宗の信仰にも入らず道を求むることろもなき人々に至つてはた 攻撃する人のあるに至つてはむしろ其の愚や及ぶ能はざるところであります。 或に一時の方便説かのやらに考へたりする人の多いのは未だ念佛のいはれを知らない 中にも念佛を以て最も低級なる宗教 更らに

外其の宗の念佛を有せぬ人々の多いに至つてはむしろ愚かさの極みであります。 へぬのであります。 況んや尚自身なら其の宗 の學者高徳といはれる人々にしても

の念佛は各宗各派の一 釋尊の眞説に復歸して念佛正態の中心生命に歸れといふのであります。 そ正法の正態であつて、世界文明の一大潮流も正に此の念佛の宗教に轉向せんとするの運動であります。 の念佛に歸らんとするの前提に過ぎぬものと云ふべきであります。されば釋尊所說の佛敎は正に念佛と **發達は要するに此の念佛の理想に目醒めんとするの一大運動に外ならず、** の念佛こそは人類生活も理想中心をなすものであつて、社會と時代とを超越して常に之等の指導となり、 悩みとを解放して、 然乍斯くいへばとて、今までの如き舊き宗敎をそのまゝで念佛の眞意義であると說くものではありま をして死後の宗教亡者の 更らに念佛を以て悲觀的、 凡そ念佛は如來を中心とせる解脱の方法であつて一切の悲觀と樂觀を打破り、 相當智識階級といはれる人々の中にさへ此の傾向の存ずることはむしろ哀れむべきの極みでありま さればとて又あながちに舊き今までの宗敎形式を悉く葬り去れといふものでもありません。 の向上發達の目標となるものであります。 てとは未だ人類の理想も宗教の本質も嘗て知らない人々の妄想に外ならぬのであつて、 あらゆる正義と自由との慈愛に生きるの念佛であります。 小宗教を論ずるものではなくして、 葬式死人の追善かのやうに思つたり、或は宗敎を僧侶の専有物かの如く考 壓世的に見たり 或は現世を無視した未來主義かの如く解したり、 故に私をしていはしむれば所謂社會の進步、人類の 各宗各派の生命たり中心たる稱名念佛の第 されば私の言はんとするところ あらゆる世界の宗教は正に此 更らに換言せば此の正態 人類の罪惡と生死の

し來らんとするにあ るのであります。 ري دي はば各宗未分の念佛であつて、 釋尊當時の南無佛の全

であ の最後であると見ゆるのであります 念佛こそは の發達變遷とか人 正に宗教の根本人類の生命であつて、 (類文化 人類の生命であつて、衆生が如來を中心として活動するの進步發達をも顧慮して見たる私の見解ではありますが

のであ 未だ一度の念佛もなく、 上とに復活 宗教として心に本佛を求めないのは所謂佛造つて魂入れさる宗教に外ならないのであ ひ極樂といふも要するに如 であり 涅槃を見 た宗教 ち念佛 凡そ宗教 見佛は成佛にありとも云ふべく、 南無佛即ち歸依佛であつて、 であるのであります。 淨土を見るす め 本質は どうして佛教の精髓に觸れられやう、 來中心の理想主義であつて、 の念佛 來所居の淨土に外ならぬは佛を見るものは又涅槃を見、淨土を見るも では 切の人類が自 Ó の南無佛の本義を忘 ない は 卽ち解脱を得往生を得 故に如 のであって、 は宗敎入信の第 已の本質たる如來に 一切の行法も要するに此 何なる佛教にも先づ此の南無佛を無視し 念佛即ちこれ成佛と云ふべきであります。然るに 人類最高の理想を理想としたものであります。 れて、 むしろ之等を一蹴し 一歩であ 佛教の精髓が割らずしてどうして佛作佛 徒らに學とし たる人とい 歸命して其 又其の最後 ふべきであります。 の南無佛全心の當體に Ċ たる永遠の生命と無限 の法の研究に の理想を完成 ては佛 ります。 されば南 が教では なら 0) は

たる れであつて、 で云ふやうな卑しき悲觀の宗教でもなく又道德を無視したやうな劣惡きはまる宗教でもない 赤子の本心であって、 であります。 Ō 之ほど純信質直の宗教にてはない Ď, されば念佛は又正に作佛度生の されば今や口稱の念佛は一切衆生の本心から如來の大悲にそのま、歸 たゞそのまゞにミオ ャに歸る生ける宗教の念佛 0 であります。 中心生命であつて、 此のところ 念佛なき所には であるのであります。 正に一切の觀念や學解を離れ へる のであ され 表は ば

一切の萬行 何なる場かにも 何なる なら 本中心であ 用をなさないのであります。 つて 聖道自 S に外なら めて成 **であります。** つて南無佛 如 一來に 力の法門と雖も、 婦依し ぬのであります。 たといふべきであります。 の一點を離れては一切の諸佛も成佛はできないのであつて、 然らば念佛 如來に南無して念佛に歸ら 道を求むること熱烈に 所謂一切の萬行も要するに此の念佛より出て は正に一 切行の総持であり 故に釋尊の成佛も私をして云はし ぬ者はない て自己を反省すること真面目なるも 中心であ のであります。 0 て念佛を 故に念佛は二 離れ いれ 切の諸 12 ば 7

むべきの至りであります。 る 力の念佛門におへ此の誤まられたる單稱念佛の行者があるといふことは更らに Ø みに捕はれて生ける如來の靈光を知らない の學者宗教家往々にして此の念佛の中心を忘れ 然るに此の缺陷たる啻に聖道門的自力修行の人人に多きのみならず、 のはむしろ佛教の惰落編見のきはみであつて最も て如來を求めず如來に歸依  $\mathbf{v}$ 世 たましき誤 ず、 徒らに三

での人 實涅槃の淨界に達したいと願ふのは理の當然であるのであります。 になやまされ つては真質の 悪の 捕ら **然と名譽慾の**寫 不死 生活なるに氣づくのであ 大悲をききたるのも誰か彼土に往生したいと思はぬ 間の生活 類 であります。 して行 方であつて、 の浄土であり、 7 はねばなりません 反つて真質浄土 **宗教とはなり難い** は要するに 傲慢疑惑の虚戯虚禮の生活 知らない 向上とを知らな には夫れ めに 一見悉く此の説と其の趣きを異にするやに見ゆるが に少しでも真劒に考ふる人々 使驅せられ、 ふべき娑婆界とたて、現世を否定して未 理想完成のところであつて 未だ人類 もよからうが。 の涅槃の大海を現土に紹來することを忘る て來ます Ž ります。而 見方とい 尤も念佛を以つて單なる葬式法事 のであります。 v 全活 人々 其間 であつて、 は未だ醒めない人生々活の多くは悉く の異質理想に はねばならな に苦ん かも 一度さめたる生ける人類の宗教として に起すところの 然るに我が浄土教殊に法然上人の D) でゐ >る生活の中に於 少し 如來は 生きて るの に於てはどうしても いの でもまじめに 人がありませう。 心の生活 であります。 此の世 てくにましまして涅槃常樂の輝 おない<br />
證據であ 來を願ひ、念佛を 道具に 丽 一の多く ては貧慾と順恙と愚痴との三毒の心 は殆んど私利私慾 考ふ人々には到底このない 然乍ら 如來の靈界は しの弊が 此の迷雲の世界を打 故に 0 したり、 而かも浄土を死後の未來 つて永遠の生命と真質の平 生活であ 人間 は到底 ある בלל 間 念佛に於 其日 へて ります。 生の 生の 有限 7 上であ 0 だ此 表面 0 一生を反省 0 なる つて では の念佛 の言葉 因とす 肉慾 を死 を以

因とすることはあまりに如來を離れたる行法に ことは今世のみで解脱のできない人 從つ をきくときのことであつて、 つて、 已に應分の靈感をうるの で全 衆生の にそのま、永遠不死の如來の慈光は輝 來 3 一度この てやがて全部が る形でではあり Ó Ö 大悲であ 一部の往: であ 之等爲めにはどうしても淨土を なる深意が含まれてゐるのであります。 つしか此のまま慈光の中の生活となって來るのであります。 つ 如何なる人でも死後でなく 生は 7 は貧慾所變の世界のみが現はれてゐる れの處をとはす念佛する人にはこのまく つて又衆生に はい できぬ ますが 光明の生活となつて一切は つてはそのまゝ如 一愚なる。 かも知れ 心の姿は已に であつて質はそのまく 念佛申す當體は 於ても亦せめ 人々 A VQ の心に を未來永遠の世界に於て眞實淨土に往生せしめんとすることは之 未來に説か 年然之等の人々をも真に救濟 ては往生ができぬとい 如來を念じ如 一來大悲の光明の攝化にあづかるのでありますか 4 て無限の向上と不死の生活を開かれて、こ は肉身のある限り中々貧慾を離れることのできない為 てもの自己本心の願 のみきこえるけれども夫は往生の方法は念佛にあ 直 厭 に單直歸命の念佛であつて單なる依法の念佛で ል Z) 夫は如來の淨界は十方三世を通じて遍法界に在ま n 應分の佛界 べき處もなく貧慾所變の娑婆界はい のであつて夫から考ふれば佛現は彼土であり ねばなな肉と思ふのであります、 來と語り如 常住涅槃の光明土でありますけれとも未だ ふ意味に解しては誤りであつて、 12 ţ, も入つたのであるの であります。 來と共に居 しやうとするが 然かも念佛を稱 るの姿とな 乍然此の信仰 即ち如 の入 乍然未來と へて つし 信 來の大悲で か靈化 の當 の起ると 姿は の進 一の行 13 めに さめ v 17

中心の人格的正態の念佛であるの によって救はんとするの方便と一つには謂所佛教信仰の中心たる南無佛思想の復活であつて之てそ如來 であります。 は殊に其の然るを拜察することが 此のことは實際 の上に最もよく示されたことであってこれ であります。 できる 殊に法然上人の念佛並に其の上 のであります。 五 一つには 人の念佛生活の内容に於 一切の衆生易行 の法

## 舌しみの中で

來である。 なければならない。 自分は今少くとも邪道に入りかけて居る。恐ろしい時だ、 如來の中に我を見出す時は如何に喜ばしい事だろう。 然し自分がほんとうに如來の光に觸れ こんな時だ親應が法然上人にすかされて<br />
地獄に落さても差支ないと<br />
斷言したあの確固とした地位に自 て歩 いてる気のする時でも物淋し **空虚な祈りが續く苦い生活だ。** いある感じに襲はれる。 純な氣分で自分はもつと は 切

吾々の生きてる事が事質である様に吾々の宗敦は事質でなければならぬ。 の電燈下へ現實化されて來てる。 あの須爛塩の上に光つてゐた宗教は今や

佛は一切衆生をあはれみてよきをも惡きをもわたし給へとも、 善人をみては喜び惡人を見てはかな み給ふ。(法然)

佛は悪人をも捨て給はざれど好みて悪を造る事これ佛の弟子に非ず。(法然)

### 竹 传 鉤 (1

ました。 遊か な した され した。 慢な顔 せぬと云つた様な全 みなす創造 つた な學生 生 8 つて の 此 睛 年 で 0) 私の從僕で 8 0 の道 かゞ す カゞ 分 Ĺ の生靈と數千の 御 當然 一の衣を ず可 o 主の の私は實に 7 子を振 生畢竟何 如! 9 7. ある Va 7 であ 반 Ď < 居る < b' つて 馬鹿 る限 Ŝ 放漫な生活を續けて居りま つて 可ら運命 で嫌 善美で有 ねば 0 者 亡靈とを預 だ ぞ。 氣切 共 Ö て居り乍ら運命に弄ば の慰安は享樂より て成る様に 命 なら であ こん 令の った 信 E É 一體人間なん た。 うた Ø F 私の凡でを生 者で御座いま B のであ 9 無い 7 坊様にな 而して今は **佘儀** ある か成りは R りま に高 々し ぞに 無 h

> の後に ません。 てる役目 石に下 を思ふと今も冷汗が出ます。 私は妻を輕蔑 が出 家族に過ぎません而 て果して私の純 せざるを得ませ います。よくもあんな事をしたと回 こて吳れ 720 死ません 等な道樂はやみました 妻を娶りました。 Ď īfii る私は を割當てられ る人として して藝を賣る女にも戯 して女として たてした。 一歩も外 感要に對 て居 愛の異名であ 信用 h Ъ> 72 7 くて て私は 0) ч 更に子供 B 妻の夫となって も善良 7 價値に女を理 <u>5</u>t 0) し信用もさ 本當に かゞ 妻は私 はせん ました 住職 の全體は . F な産み子 妻とは なる夫では に過ぎませ の用 n で せら しう る 私 か る 15 らは流 6 す 供 ---あり 収 B h を育 を足 か。 ---C 0 0

話に 果して 佛と云ふ なりません き外 的生活 私に は教 と均 で ませうか ある られ 内的狀態も 現質の 叉淨 たる 世界を離 き佛はど 全く

らな 知り 着に一 「初め死を決心した時モウ身體の感覺はあり ませ き返 ん。 ねました處大略左の た る が ませ t h 丽 L あ を發見した n カゞ ません つたが 私は 處かで向脛を黑づむ程打ちつけたが た處翌朝 其時看護長を た。そこで病院に收容し一ケ月程で囘 して適當に手當をした為に運ょく つた。一寸 あ 派兵の聲 ķ ります。 と云 益々 位 b かつたと後悔致 て行 咽喉が少し變であ で 行くのが實にすごい程然し私し身體が段々下 す。 つたらあ 0 食 で直 した 天井の鈎に犢鼻褌を懸 へと落ちて行きます。 如き話であ して居つた 17 入 過失から 人本當に 動なぞ遠く n 軍醫看護卒など馳 0 ひますけ 時とかに 3 つた文で 可愛相 つたと申します。 私の友人が色 こんな事なら死 程です ~ 下 ども追付 縊死 なり も息 營倉 其氣持 心けてぶ が何にも و 0 へと當 W して居 氣 行く ラツ 苦痛 一々尋 復し を 7 入入 な カゞ

へらだ 宗教も 云 其物 後に 3 あ ム事を です に質は つて ませ まし b 2 いて見 そ死 ñ 於 は たる如 の私 h Ť 大切 ては 畢竟死の端的にこそ大なる効果は な 丽 ï でし 念佛 考 御 其物 死が ٤ ると病 ってあるこ へなせら て信は其人の心作用に過ぎない 何 さ宗教 は いますけ 自覺され た 1: 等 は 關係 致しまし 何 は何等の効果を示さな て仕 け で 0 は まだ青春 11 寢臺 n でなくてもよい譯であ n するものではな もな 單 ました。 無力 れども實 ども宗教形式は 7 に是丈であ ても全然 から い物では の上に生き返った ました。 る だらう に富 な 死に V 本當に淺薄な 際そう思 過ぎる める私 否定する譯もあ 切る迄が な 5 b ますが Ň V 何 0 7 て の唯今に CI あ せ 6 不 らうと ま 加 જ 故 n 5 御 な Ũ Ĝ ţ 12 切 Z) 間 カゞ 恥 敎 あ 13 0

30 でも で見 と私に る Ç) のだ 現在 8 C Ø カゞ V まして死 72 は な V で は 0) とてそれ 今の私 は貪着は に對し 現に生 若死 V. Z) あ かぎ な かっ ら極樂が 3 Ų> 私 h さつ だら Z はこの様に手取早く 12 7 'n 而 は が は な 17 で は n 其れ 臨終正 きて ゝあ て其死 死ぬ んで見 果してどんなだやら判 カゞ 如 何 70 V とら後の事 一きて居 O ч 何あらふと地 等 迄よ る私に きて 老人 の脅 の端的 念も で けれ こ。よし臨終正 なく 17 る 私に死 な も及ぼ は私 大緣 念死念佛 って 13 71 で 7 緑が如 0 丈 Š Ø は す事 0 בנל 現 遠 劾 カジ ては 檀家のますか けて B 3 21 V 果を現はす す ならぬ 念で死 なら 間 何 は 生 B る 7 9 あらう きて居 たも 題では 恐ろ さて は居り 出 のであ がら言言 兎に 一家な は  $\sim$ る h 不 0

叉 の五人 たいる 念は 味深 であ 人に 下 かぎ す T 二度目 い御話 味あ 卼 其 粼 12 3 六 0) 2 する事 の人 氣に持 まし あ 時 72 た 0 لح 某老僧 ので 事が Ā 3 b b が發得 二三年 まし なり を承 MJ 72 を で私達凡 9 岡 夕 Ď 0 잧 T たが は 崎 b 0 食 6 小 す 御話 くし乍ら まし しな した は居ました で御 ます 學校で異如に關する講演 んからとてそれでいたの人の闘する所のと いと思 目に た。 B 。其前夜私の處 15 0 出て念佛 要求 均  $\mathcal{L}$ しき我 712 し振りに昔話もしま て居 ひます し此 3 17 カゞ 7 は 9 時代の先 其樣 て三昧 の已前 力; 三味に就て E か τ ので な 0  $\overline{\phantom{a}}$ な事 h 如 物 7 御泊 でな 敎 有 來 發 17 難い 得 をし ·墨S ませ は 辨 Ė Ø יל の興 樂 中 特 0 F 0 前 de  $\mathcal{V}$ -3 C Ø

る前に五千遍と云ふ具合になりました。 る様になり益々 ら誓ひは致しません。 妙に唱へ初めました。 來る樣 ので まし あります め 0 らと約一年半も續けましたのです。おい如來 と思つたけ ります段々馴れるに從つて時間に餘裕が たのです ですから質に滑 アナタが御覧になつて魔分滑稽で御座い ですから何の變哲もありません。 なになる では たが日 の時私も 私 て居 に課でも かも知れ 馴 だから日課なぞやる気もなか むる其様な物を道心と思って居つ b ども直ぐに止めるも意氣地がな れて益々ずるくなり朝五千遍寢 、時は心 時日課の宣誓を致します規定で たので御座います。 を致さうと思ひました。 稽極まる物だつたのでござい 初めは一萬遍が殆んど一日 ぬと思つて毎日一萬遍宛神 た見たら佛を信ずる事が の中で誓を拒絕し でも日課」なのですか りません。 馬鹿々 て居り 出來 私達 つた

> す。 正しからざる内は畢竟砂の塔に過ぎません物で 何したらよいでせうか判らなくなつて 仕 舞 ひ して居るのに過ぎませんのでし 私は全體何 私はモウ初め したでせら 何と云ふ情なさでせう。 の爲めに申して居るだのらうと。 の目的は其方退けで唯 一夜駭然として氣が 信仰の欲望も汚れて 720 本當にモウ だ數を厄介視 付きまし 素 如 >

して手は展びたり縮んだりはしで吳れない。まして宗教に口出來上つてゐる着物と如何に一致仕樣としても長い袖に對 チャンだ。」それが本當でなければならぬ。(顯) 動産的佛壇的宗教である。寧ろ「父は禪宗だが俺はクリ 於て一入である。無理に一致したる時は破産の旣に起きて ゐる時だ。 財産と共に譲られた祖先傳來の宗教はそれは不 ż

口徒らに旣成宗敎をブツ壤して罹かろふとする者ではない、 釋迦も孔子もクリストも彼等の如き宗教的偉人の裏には一 以て貫いてゐる生命の流がなる。 それは真質生命への體験

#### 底から法院

みと悶へとの空虚な淋しい俺の生活

を救ふ ねる 來るやうになつた。 愛であると云ふ事丈けは判然と意識することが出 が解 ことが解 らなく 力が との捕り えず「生さん」と祈願 再 つて來た、 房となりきつて、 いと知られ C 苦しみと悶へとが起て來た。 そしてより高き誘惑とより張 て來 概心のミオヤは現實の俺 たと同時に、 する純心は力であり 「概念」に虐まれ 本當の 7

概念 **つ**の ч と云ふ つて Ė 3 C 分 のみ オ な B T Ŏ へて下 3 の理 拜めるアナ オ **俺達の救は** ヤ むことである。 ・を拜み 論が Ó さいと敬虔な祈りから<br />
感激と微笑 お縋りす を摑みた タである。 た れるミオ V ればい のか て現實の俺を救 ございますと申さ To の 、それともミオ D) て本當 書物なんかを捨 ヤは信ずる事に のだ、 あ くそうだ、 の生命と たいい 7

んだ。

T.

如何なる處、 Ó N > V) た愛であり、 の創造者とならねばならね。 つみ總て て其罪を氣に 境地である 即宗教である では俺 俺に惠まれた黎明の光り、 義だと體驗し得 のも 報酬を求め望すぬ の 何なる人に對つても、「人を愛さう が かけない」と云ふ能動的の愛は 總てのもの 0 全沒我的絕對的熱情 はれ、 72 總て は愛することによつ と云は 叉俺は 0 b それは此の愛 れると俺は めが 如何なる時 愛である。 から流 生 かさ

・お ン 底の惱 と顯はれて來た。個みと呪ひの暗黑が呼 破れて法党

らずと信じて無間に修すべし 罪は十惡五逆の者も生ずと信じて少罪 も犯さじと思ふべし、 行は一念十念なほむなしか 罪人なほ生る況ん (法然)

。あの狭い自由具樂部で、造み骨が疔れることひどい暑さになりました。相變らず御活動ですのどい暑さになりました。相變らず御活動です宮 澤 説 忍

しての忌憚ない所を述べさせていただらうと思ひ偖て私の一つの感じとして私が自由倶樂部に對でせう。

なことを企 分のある所は のことだらうと思ひます。宗敎が型に嵌まり 眞面目の空氣 て宗教的運動が盛になって來ました。 溷濁せる現代に於てこれ程自由な眞面目 の第 フ て洛陽の新價を高から  $\mathcal{C}$ 才 ット て居る様ですね。 です。 一寸ないと思い ウ氏が宗教的人類同盟といふ樣 これは私 く残 一面に於て確に眞面目な氣分 つた ます 二人 のは、自 係の書物が此の頃 又四五年前までは して居るやうで で 近頃は各方面 山な気気 なく皆 獨逸で の毎 は

たとい にし 主義が盛であるといふことは唯偉大な廣告力 るも 部であり 何等飾る 思ひ込む。 の人はあの本が何版になった、 主義が最も正當なものであり、 ではないが て大か騷をして歩く。勿論廣告その樣です。そして馬鹿に大い廣告をし、 てうまく つて居ると もあるかの如 心を唆り人々を籠絡しやうとするものが少く しかし又一面から眺めるとかかる機運を利 てしまつて何等 のでありまず 面目すぎますから、今少し社會を胡摩 へばそれを見なくては一人前 雑誌眞生である。 所なく眞面目でやつて居るのは自由倶樂 丸め込まれ それは いふことと同一です。 く思はれて居るやうです 事實に相應せざを廣告は社會を害す は賣れぬだらうと思ひます。 いいとしても、 そして大きな廣告力を有する てしまう人が多 判を加へない 勿論廣告そのものが惡 失禮かも知れません 且天下 あの雑誌は それを見て鵜吞 しかるに世 0 では 又太鼓を叩 この様にし Ó な 興論でで かるに 何萬出 0 を持 その 0 V H

所に私は云び知れぬゆかしさを感じます。あない。唯共鳴した者のみが互に集るのだといふれども賣れぬ賣れるは問題でない。吾々は商賣ぢ氣があって廣告でもすれば賣れるでせうが?。け

た者 それ は な太鼓を叩 を威ぜず 諸兄が全くその様な商賣的根性なして心から感じ 叉此頃は○○ で B 71 った團隊が たことは田含では珍し 心ある人はあせりい 同 る かゞ 志が集 に於ては益々嫌だ。 公共の為焦眉の問題ならばまだしも、 つて愚民を籠絡し には居られません。 と思ひます。 いて騒ぎ廻ることによつて成されるも つてやる所に私は更に深 よく太鼓を叩いて騷ぎまはる。 團とか○○軍とかいふ樣な名稱を い感じを持つてはいない。 以て自 かられるだなうけ しかるに自由倶樂部の 眞の宗敎運動 個の團體の擴張を いゆかしさ あはそん れ ど 唯あ

雑誌です。しかもその為にかへつて一般としてはら止むを得ません。次に眞生は非常に深味のあるるかも知れませんが私のほんとに感じた所ですか此のやうにいふと何だか馬鹿に褒めた樣に見え

あると思ひます。

あると思ひます。

現代人には最も相應しく、ピッタリとした宗教で現せんが、よく噛むと味が出て來る樣に思ひます。常特に永遠の生命と無限の向上を求めて止まず、常特に永遠の生命と無限の向上を求めて止まず、常りには一寸ゴッゴッして居る様に威ずるかも知れてはは一寸ゴッゴッして居る様に成するかも知れていば一寸むづかしい嫌がありはしはいかと思ひますが一寸むづかしい嫌がありはしはいかと思ひますが

永遠への姿でありたいのだ。□永遠の生命と言葉で言ふのではない、さう

も動かしむる處のものでなければならぬ。動かしクリストを動したる力と共に自分を□生存の意義は概念的のものではない釋尊を

於て生きるのである (顯)□日々の生活の刹々を十字架にかけることに

#### 吾が 朋便 ŋ (五)

せら 法山は弘法大師が 四日 n 6 智山 有ります た處で、 へ参りました。 恆川董一様より 香木阿彌陀佛が 其鐘の銘に 一千日念佛を修 其內妙 安

又「空海が数の道は一つかね彌陀 れました。田舎の僧院に日送り 身凡てが歸命の生活と尊く觀せら の浄土へともに南無阿彌」 て日々に退轉する私を深く深く悲 しみます、 書體で歌もありました。 「信仰の生活」を拜見しました全 南無阿彌陀佛 〇和歌山 一度お目に掛り度い 武田奝隱様より **空**海 書 と面白

> 眞に心機一轉いたしま うちにさへ裏切る歡びが湧きます 喜びに狂ひます。 さ真に生きがひある月日を暮らさ せて頂いて居ります。 ○高崎 松園様より た。

为います。 私を指導して下さいました。 ぬと聞けば羞かしい事ばかりでご のみ高くても實行がなくてはなら せ ないからだとのお詞は最もよく 心を惱ますのはよくなる方法を 理想

る事を てお伴ひ下さいませ。 なる悲しみに喰入られて居ります の他何物もなき貧人形に過ぎざ 今日迄なしたる全分を省 〇四月市 願くば時々御叱責下され 中野新兵衛樣 みて切

この私は永遠に此惱みより 脇屋孝一様より 取り

困つた時にも私の心は

新し ę, せらか。 17 >念佛を 去られる事があるでせう 如來 たべ私は今日の生存に喜び 救濟は無條件だと云ふて して居る様な事で

I V

0

皆樣 ます。 ことの てとよと喜ばさして 知らせ下さいませ。 は今頃どうしてゐられませうかお ことを感謝 生活を日々に味はして頂きます。 の大慈悲を想ひ、 近頃は ○在京 へも失禮いたしてゐます。 殊に近來はしんみりと如來 にも静 如何になつかしく、 全く學寮に引籠り 土屋 かに道友を思ひ出す たしてゐます。 法然上人の內的 いただいてゐ より 、勝で、 叉尊 V

土屋観道より

で毎日生長し ●讀者諸兄へ、「眞生」もおかげ て來ました、

せら。 者の培加運動を計つたらい と存じます。 'n 三ヶ月間は無料で御惠送した ない 皆様も愛讀者を御勸め下さ 道友をうる為め 試にや つて見ませ に此際讀 て未 かがで 知

完全に近くてともできませう。 體のつもりになりさへすれば段々 け合つて下さ 謝です。 つてやつて下さいます心からの感 も宗教大學の學生諸兄が赤誠 つて下さいます。 いからお互に自分のものとして助 ●「眞生」の編輯 大野の雨兄が全力を注いでや のふり見て我ふり直せとの 初 から完全もありますま vo 皆んなが 發送や教壇の方 は主として、 二心同 を以 t[1

> 爲め です。 世の中 も反て失敗した時の方が多い もとかとも思 ほんとうの修養は成功した時より ふり でな して見れ Ö 出 いものはありますまい。 來事が皆私共の修養の すことに心か れます。 ば失敗は又成功の it たら、 やう

〇六十銭 〇二圓五十錢 意誌 料排込芳名 宮下靈山 木村辯學 魚津善法 爽 宮澤說忍 〇二圓

〇五十 **大坪文**治 長圓 長谷部ギン 宇平光太郎  $-\frac{1}{\sqrt{1}}$ . 末次 ·虎三郎 山清

大谷象平 池上春五郎 宗泉寺 徳永アイ 長畑須賀 內

> ねて つては屎甕の 却て顯さんの顔に似てると評 疊 縮少しましたお赦し下さい ○緊輯の後に 0+ 陽を仰げ か女難か何れ 一へ自由畫像「受難」を掲げました 載せ切れず、 ぬ此部室では梅 井深重剛 栗生來治 にしても難相 原稿を澤 獨斷で切り 蓮蓝 Ш 頂 にな 判受 此三 お 脱り V 年

大正十一年七月一日發行 眞 生 附 錄大正十一年二月二日第三種郵便物認可

唐澤念 會

Ħ 八月三日ョリ九日マデ七日間

(信州上諏訪驟下車約十三丁)

道

土屋觀道師 淨敎眞隨講話

七月二十五日マデ芝公園十四號九番土屋方

込

大正十一年二月二日第 一回一日發行)

	費	込	師	日			道	
	金壹圓	七月三日限	藤本淨本上人	七月七日	於		俗	
		三日	<b>净本</b>	日 晨	近江八幡町		宗	
	宿泊	限り	上人	晨朝より	八幡		序乘 :講	
	(宿泊食事共)			九日日	町		話	
	<u>₹</u>			中	西光寺	1	<b>a</b>	
				, <u></u>	寺		=======================================	
		•						
			٠					
,				· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	-			
		定 大大		——————————————————————————————————————	光口龍	n (=1 == -)		
即 即 爹	1 1	買正正。		」」 全月 翟水	二修道		駿河臺水	]]]]] 新神法明 生の輪照
刷刷和 所 <sub>東</sub> 人東	<b>發</b> 發編 子 行 東 子 人 介 東	千年年 日 年十六 座 月月 東	土曜	1金●	氏講生	上口隣	第光}	_ 道 □ _ □□
京京市原市山北外	京市土芝區	半一二京年 日日四六 發第七	·	使由 上其俱 是仙鄉	其會化第一	<b>山曾</b> 	祭明 イン 水変	○ □ 露光 こ無西 ろ我亞□ 「愛藝」
印刷所 無我山房一印刷人 原 子即人 原 子	田區駿	十一年,一十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	11月	它随前。 有時	\ <u></u>	金曜	茶ノ水間下車明治の一般の一般の一般の一般の一位の一般の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の一位の	の我型 一 愛藝奉 一 術仕
印二人	上窓 十 4	王 同一 局	-> 生台	<b>经</b>	土曜夜	日夜	早明治	額□ 生 <b>文</b> □□
工二 二番 宣地市	一 明 號 『 一 地 一 番 九	P一則四一日發行便物 認可與生社	₹ 診會	T '	西	土 :	大	化和更 運光生
一担品信息	上地道番				川	屋	學	動